

Izumishikibu with Gardens

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉田, 実 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6541

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



和泉式部の庭と前栽

倉 田 実

【キーワード】 題詠、荒れたる宿、草葉、孤愁、贈答

はじめに

王朝貴族女性と庭とのかわりを、これまでに『伊勢集』⁽¹⁾、『蜻蛉日記』、『枕草子』⁽²⁾などにおいて検討してみた。今回は、和泉式部の『和泉式部集』、『和泉式部続集』を採り上げてみたい。これらにも、庭や前栽へのまなざしが多く歌われている。

大江雅致女となる和泉式部の場合、和泉守橘道貞、帥宮敦道親王、丹後守藤原保昌などの他に多様な男性関係があったようで、それに伴い住まいも変わっている。自宅以外に、和泉国や丹後国に夫と下向したり、誰だか不明の男の家に住んでいたこともあったのである。また、転居もしばしばして、詠歌された時点で、どこに住んでいたかを明確にできないことが多い。したがって、家々によって個性があったであろう庭や前栽の差異を問題にすることはできない。しかし、和泉式部のまなざしによって捉えられた庭や前栽であることは確かなので、そこを取り出すことだけでも意義があると思われる。

和泉式部には屏風歌や題詠歌も多くあり、前栽が詠まれても、実際

和泉式部の庭と前栽

の庭の様子に即した歌でない場合がある。しかしこれも、和泉式部の抱く前栽や庭に対する思いの反映になるので、題詠歌などであっても、囑目詠と、ひとしなみに扱っていきたい。

和歌作品は『新編国歌大観』、それ以外は『新編日本古典文学全集』により、表記は私に改めた。また、二つの歌集同士や各内部で重複がかなりあり、異同もあるが、分かりやすい本文を優先して掲載した。なお、窪田空穂『和泉式部集小野小町集』(朝日古典全書、一九五八・一〇)は『全書』、佐伯梅友・村上治・小松登美編『和泉式部集全釈』(正集篇)〔笠間書院、二〇一二・六〕、同『和泉式部集全釈―続集篇―』(笠間書院、一九七七・一〇)は、『全釈』、『全釈続』、清水文雄『和泉式部集・和泉式部続集』(岩波文庫、一九八三・五)は『文庫』と略記する。

一 前栽の風情を詠む連作歌群

『和泉式部集』には、前栽の風情そのものを連作的に詠んだ歌群が三つある。まずはこの歌群を見ることから始めたい。中古私家集で、

前栽を連作的に詠んだ歌が収載されているのは、他に『大斎院前御集』があるくらいなので、これらの歌群は貴重である。

前栽のおもしろきを見て、言ひ集めたる

- (1) 荒さじと思ひし宿を花により萩の原ともなして見るかな (四六七)

- (2) 我が心ゆくとはなくて花薄招くを見れば目こそとどまれ (四六八)

- (3) 女郎花いつこに植ゑむ我が宿の花にて見るに惜しくもあるかな (四六九)

- (4) 睡をし寝で夜ごとに聞けばあはれにも鳴きまざるかな鈴虫の声 (四七〇)

- (5) 我が宿を人に見せばや春は梅夏は常夏秋は秋萩 (四七一)

これをみて、一品の宮の相模
〔前栽のおもしろきを見て、言ひ集め〕ることがあったこと、これは平安貴族女性の生活的営為の一端を示し、また庭とのかかわりを示唆している。

この歌群では、(3)と(5)に「我が宿」が詠まれているので、自邸の前栽になる。和泉式部は前栽の手入れを怠らなかつたようで、(1)では「荒さじと思ひし宿」とされている。「荒さじ」とは庭に雑草の類となる蓬・葎・浅茅などを生やさず、「蓬生」「葎生」「浅茅生」、あるいは「蓬が原」「浅茅が原」にしないことを言う。しかし、歌は、「荒らすまいと思つていた我が家は、草ではなく花によって、荒れた原よろしくことさら萩の原として見ることだ」として、諧謔的な趣向で詠まれている。庭一面に萩の花が咲き乱れている光景となろう。宿自慢、花自慢の歌になるが、和泉式部の家は、「荒れたる宿」と化すこともあったので(後述)、あやにくな趣向でもあった。

(2)の「心ゆく」は気が晴れる、満足する意。ここでは「なくて」に続いて愛情関係で満たされない思いが潜められていよう。「私の気は

晴れないが、花薄の人を招くように靡いているのを見ると、つい目が引きつけられる」というのである。薄が靡く様から恋人を招く姿が連想されてしまうのである。花薄の美しさを詠むのに、自身の思いや人事がよそえられているのであり、これが和泉式部歌の自然詠の特徴となっている。

(3)も人事が絡んでいる。「女郎花を自宅以外のどこに移植しようか。自邸だけの花として見るには惜しい美しさだ」としている。恋の事情があるとすれば、意中の人の家に植えたい意が働いている。そうではなくても、交友関係にある、草花に親しむ人のことが念頭にあろう。

(4)は庭に放した鈴虫の声が詠まれており、これも哀愁を感じさせる前栽の風情であった。庭の秋虫については、この他にも詠まれているが、省略したい。

〔前栽のおもしろき〕は、秋の花のことであったが、(5)は、最も好まれる春夏秋の花暦になっている。「私の家を人に見せたいものだ。春は梅、夏は常夏、秋は萩が咲き匂うので」の意。梅・常夏・萩は、和泉式部が好んだ花々であった。これらの花々が咲きほこる我が家を人に見せたいものだと、花の美しさを共有したいと言っているのである。和泉式部はこの五首などを相模に見せることがあったのかも知れない。そこで相模が返して贈答歌となり、ここに置かれたとも考えられよう。贈答歌なので、これ以前の四首とは無関係かもしれないが、このように処置しておきたい。相模は和泉式部の歌に冬の花がなかったので、(6)で「菊の残りの冬」を言つて締めたのである。

もう一つの前栽を詠んだ歌群は、次のようになっている。

いとつれづれなる夕暮に、端に臥して、前なる前栽どもを、ただに見るよりはとて、物に描きつけたれば、いとあやしうこそ見ゆれ、さはれ人やは見る

小さき松に

- (7) 後々も松ばかりこそ偲ばめと恨むるよりも頼もしきかな (八一)

六

竹

- (8) ありし人あらば来なまし風吹けば上うちそよぐ竹のよごこと
(八一七)

柏

- (9) 柏木は宿に掘り植ゑむ下草をかりに人来る名のみなりけり (八
一八)

萩

- (10) 今咲かば人も来て見む秋萩を下葉の色はわれのみぞ見る (八一
九)

山吹あやしう咲きたるところなり

- (11) 蛙鳴く井出にならへる山吹は虫の声する秋も咲きけり (八二〇)
檀色づきたり

- (12) 木々よりもまだき檀の色づくは秋に入る日に露や置くらん (八
二一)

鶯実あうざち

- (13) 木伝ひし梅をばおきてこれだにも鶯の木とひとくいふらん (八
二二)

軒の蜘蛛の巢い

- (14) 思はじを荒れたる宿にかきくらす蜘蛛のいがきに風したまらば
(八二三)

詞書の「いとつれづれなる夕暮に、端に臥して」とあるのは、男の
来訪がない所在なさであろう。だから、前栽を眺めていたが、ただ見
ているよりはと絵に描いてみたところ、ひどく変に見えたものの、人
が見るものではないと思ひ直したという。「かきつけ」は単に歌を書
きつけたのではあるまい。したがって、「小さき松に」は『全釈』が
指摘するように、「小さな松を画いた絵に」、歌を添えたことになる。
以下の詞書に「に」はないが、補って解釈すべきであろう。もしこの
通りだとすると、前栽を絵に描き、歌を添えることもあった事例とし

て貴重である。

最初の二首(7)(8)は死が絡んでいる。(7)は、「自分がかなく亡くなっ
た後々も、松だけは偲んでくれよう、だからその長寿を恨むよりも頼
もしく思うことだ」としている。

(8)は「ありし人」とあるので愛して亡くなった人のことになる。
「もし存命ならば、訪れてくれたであろう。風が吹くと上葉がそよぐ
竹の節ふしではないが、夜ごと夜ごとに」の意。松や竹は囑目の景であっ
ても、人事がよそえられるのである。

(9)は、上二句の「柏木は宿に移植しよう」という意と、それ以下の
「柏木の下草を刈りに仮に人が来るといふのは評判だけであつたのだ」
という意とのかわりが分かりにくい。『全釈』は、「でもほんとうは
柏木なんて」と補っている。あるいは、「仮に人来る」のは評判だけ
であつて、いつも来てくれるのだというのかもしれない。

(10)は、実際の愛情関係があつての歌とも詠める。「今咲いたならば、
あの人も来て見るであろう秋萩だが、枯れた下葉の色は自分だけが見
ることだ」としている。咲いた折はともかく、心は離れているので、
あの人は枯れた下葉をみることはあるまいと断念するのである。失わ
れそうな恋の思いが反映していよう。

(11)は、山吹が狂い咲きした理由を、その名所の「蛙鳴く井出」に求
めて詠んだ機知的な歌である。「春には蛙の鳴く井出に咲くを見習っ
た山吹は、同じ虫の鳴き声のする秋にも咲いたことだ」としている。
蛙は『和名抄』が虫類に入れていのように、当時の認識は今日と変わっ
ている。蛙という虫が鳴くことと、秋の虫が鳴くことを同様のものと
見なしたのである。

(12)も、檀がいち早く紅葉する理由を機知的に見出した歌である。初
句は底本「きしよりも」だが、これでは意味が通じないので、『全釈』
に倣って「きく」の誤りと解して校訂した。「他の木々よりも早くに
まゆみが色づくのは、弓で射るではないが、秋に入る日に露が置いて
色を染めるからであろう」としている。自然の理を機知的に解してお

り、露が紅葉の色を染めるとする発想によっている。

(13)は、「鶯実」を詠んだ歌である。『和名抄』『鶯実』に「宇久比須乃岐乃美、作俗云阿宇之智」とある。五句が分かりにくいのが、「枝移りしていた梅の木をさしおいて、この木でさえもどうして鶯の木と、人來と鳴くわけではないが、人は来て言うのだろうか」となろうか。「ひとく」は「梅の花見にこそ来つれ鶯のひとつくひとくといひしもある」(古今・雑体・一〇一一)とあるように鶯の鳴き声であった。梅の木でもないのに、「あうずち」をなぜ鶯の木と言うのかといふがしんだのである。

最後の(14)歌は、「荒れたる宿」の蜘蛛の巣を詠んでいる(後述)。蜘蛛の巣は前栽の風情にかかわることもあるが、ここは家の荒廃を象徴している。この点は、次節で触れたい。

* * *

三番目の歌群は題詠歌で、實際の前栽を詠んだものではない。しかし、こうした歌にも前栽に寄せるまなざしが窺われよう。あえて前栽の歌群に加えた次第である。

- 花の時心不静、雨の中に松緑を増すと云ふ心を人の詠むに
(15) のどかなる折こそなけれ花を思ふ心の中に風は吹かねど(四五〇)
(16) 松はそのもとの色だにあるものをすべて緑も春はことなり(四五二)
灯の前に花を思ふ、と言ふ心

(17) 夜のほどに散りもこそすれ明るるまで灯影に花を見るよしもがな(四五二)

(18) 灯に当てて見るべきものを桜花いくかもあらで散るぞ悲しき(四五三)

(19) ともしびの風にたゆたふ見るままに飽かて散りなん花をこそ見れ(四五四)

この歌群は二つに分かれ、それぞれが漢詩題によった題詠になって

いる。

前半の(15)は、「花の時心不静」を詠んでいる。花を散らす風が吹くと、散るのを惜しんでのどかでいられないという常套的な発想をひとひねりした趣向になっている。「花の時は、のどかに過ごせる折はないものだ。花を思ふ心の中に散らす風は吹かないけれど」と言うのである。

(16)は、「雨の中に松緑を増す」を詠むが、「雨の中に」は詠まれずに隠されている。ここは「我が背子が衣はるさめ降るごとに野辺の緑ぞ色まさりける」(古今・春上・二五・紀貫之)と詠まれたように、春雨が緑の色を深くするという当時の通念によっている。したがって、「松緑を増す」を詠むだけで、「雨の中に」が背景に据えられたことになろう。歌の発想としては、「常盤なる松の緑も春来れば今ひとしほの色まさりけり」(古今・春上・二四・源宗子)と同じである。「松はもともと緑であるのに、およそその緑も春は格別なのであった」の意。瞩目的な詠歌としてもおかしくはないのであり、前栽に寄せる思いは、題詠であっても変わらないのである。

後半は(17)(18)(19)の三首とも「灯」と「散る」が詠まれている。(17)は「夜の間を散ってしまうかもしれない。そうなら困るので、明けのまで灯火で花を見ていたいものだ」の意。(18)も同じ趣向で、「夜は灯火の光にあてて見るべきものなのだ。桜花は幾日もせずに散ってしまうのが悲しいので」となる。共に散るのを惜しんで夜も灯火で見たというのである。

(19)は、やや分かりにくいのが、「灯火の光が風に揺らぐのを見ているのにつれて、満ち足りなく散ってしまう花を見ることだ」となろうか。後半の三首は、夜に灯火によって前栽の花々を見ることが詠まれている。さしずめライトアップされた花という趣向となる。これも前栽とのかかわり方を示唆するものとして貴重であった。

* * *

和泉式部の前栽に寄せる思いを詠んだ連作歌群を見てみた。前栽の

興趣に触発されて歌群となり、逆に、所在ない思いが前栽の風情を見出して絵にされ歌が添えられて歌群となっていた。また、花や木が詠まれた漢詩文を和歌に翻案して句題和歌にし前栽への思いを連作にしていた。これらは、和歌生活の一端を示す歌群となっている。日々の生活において、前栽が大きな比重を担っていたのである。また、そのために前栽の手入れを怠らなかつた様子も窺われるところだが、その一方で、(2)(8)(10)などは、満たされない愛情関係が庭を見る視線と関係していた。こうした歌はさらに認められるので、節を変えて続けたい。

二 花は心の見なし・花ぞこの世の絆し

前節では「前栽のおもしろきを見て」、「ただに見るよりは」という形で、前栽を見て詠まれた歌群を見てきた。これ以外にも、季節の花の折に、「…を見て」とされて詠歌が置かれる形が、それなりに認められる。平安女性たちは、何かにつけて花を見ていたのである。花々に和泉式部は何を感じたり、思っていたのか。ここでは、「…を見て」の形で詠まれた歌を検討したい。

この形での詠歌は、何らかの心境・心情が託される場合と、花々の様子に感興を覚える場合とがある。前者の場合を主に見て、後者は個々の花の特性の問題なので例示だけにとどめたい。次節以降で問題にしたい歌は、この節で引用しないことにする。

それでは、何らかの心境・心情が託される例を順次見てみたい。

物思ふころ、卯の花を見て

⑦ 郭公むべもなきけり卯の花の折はものこそあはれなりけれ(六九六)

「卯の花」の「う」に「憂」を響かせた歌である。「時鳥は、なるほど鳴き、泣いたわけだ。卯の花の咲く折は、憂いのある時なので、何かとしみじみするのであった」の意。「憂」は、詞書の「物思ふ」に

対応している。

秋、花どもの咲きたるに、山菅の咲きたるを見て

⑧ 音聞けば人の物思ひやますげを心み顔に咲ける花かな(八一四)
「山菅」の音から「止まず」を導いた歌である。「秋風の音を聞くと、人の物思ひが止まないのを、見届けようとするかのように咲いた山菅の花であることだ」の意。前歌とともに花の名を掛詞とすることによって首に仕立てている。

山吹の咲きたるを見て

⑨ 我がなほをらまほしきは白雲の八重に重なる山吹の花(続・六八)

「山吹」から「山」を取り出した歌である。「私がやはり住んで折り取りたいのは、白雲が八重に重なる、重畳とした山に咲く、八重山吹の花であることだ」の意。「をらまほしき」は「居らまほしき」と「折らまほしき」を掛け、「八重に重なる」は「白雲」と「山」の両方にかかる。帥宮挽歌群の歌で、「居らまほしき」は「山」ということになり、自身の出家の意を潜めているが、情景としては美しい。

梅の花を見て

⑩ 梅の香を君によそへて見るからに花の折知る身ともなるかな(続・九四)

⑪ 手折れどもなに物思ひも慰さまじ花は心の見なしなりけり(続・九五)

この二首と次の⑫も帥宮挽歌群の歌。⑫は「梅の香」を「人の香」によそえた歌である。「梅の香を、宮様の袖の香によそえて折り見たせいで、やっと花の咲く折を知る身となったことだ」の意。「折」は季節の「折」と、花を「折り」を掛けている。季節の推移も分からないようにして過ごしていたが、梅の花の香りから宮の袖の香を思い出して、やっと花の時節を知る身になったとしている。春の時節に、生前の宮は、梅の香に似た薫物をしていたのであろう。

⑬は「花」を見て慰めにならない心境を詠んだ歌である。「手折っ

てみたけれど、何も物思いは慰められないことだ。花というものは、心のありようで見なすものなのであった」の意。気のせいでも、どのようにも見えるというのである。「花は心の見なし」は、まさにここで検討している花々の歌に認められるのである。

桜のいとおもしろきを見て

⑦ 花見るにかばかり物の悲しきは野辺に心を誰かやらまし（続・九七）

「桜」を見ても悲しみのままであることを詠んだ歌である。「花を見るにしてもこんなにも物悲しいのなら、野辺に誰が心を馳せて、せいせいすることがあろうか」の意。これも④と同様に、「花は心の見なし」ということになろう。亡き宮を思う折は、美しい桜も悲しみを癒せるものでないと言っているのである。「心を…やる」は、「心を馳せる」意に「心をはらす」意を掛けている。

花のいとおもしろきを見て

⑧ あぢきなく春は命の惜しきかな花ぞこの世の絆しなりける（続・一八六）

「花」が「絆し」になることを詠んだ歌である。「どうしようもなく春は命が惜しいことだ。花というものは、この世に留まる絆しなのであった」の意。死にたい思いはありながら、美しい春の花を見ると、やはり命が欲しくなるというのである。「花は心の見なし」であり、また一方では「花ぞこの世の絆し」と思わざるを得ないのである。⑦⑧は共に「いとおもしろきを見て」の詞書でありながら、花の興趣よりも哀愁が自覚されていよう。

宿花よめはなの咲きたるを見て

⑨ 返らぬは齢なりけり年の中にかなる花か再びは咲く（続・一八九）

「宿花（返り咲きの花）」を詠んだ歌である。「花は返り咲きしても、返らないのは齢なのであった。一年の中にどんな花が二度も咲くのだろうか」の意。もう二度と若くはならない人の宿命を宿花に託して詠ん

だのである。ここにも哀愁が漂っている。

亡くなりたりける人の持たりける物の中に、朝顔を折り枯らしてありけるを見て

⑩ 朝顔を折りて見んとや思ひけん露より先に消えにける身を（続・一九四）

「朝顔」が押花になっていたのである。遺品の中に朝顔が押花になって残っていたのである。「朝顔を折って見ようと思ったのだろうか。朝顔の露より先に、消えるように亡くなってしまった身なのに」の意。「消え」は「露が消える」意と「命が消える」意を掛けている。亡き人は誰だか未詳。帥宮なら敬語が付くはずである。小式部内侍も先立っているが、『全釈』が指摘するように、内侍と書いたであろう。

世の中はかなき事など言ひて、槿花のあるを見て

⑪ はかなきは我が身なりけり朝顔の朝の露もおきて見てまし（続・三九四）

「朝顔」に無常を思う歌である。「槿花」は、『全釈続』『文庫』が指摘するように今の朝顔になる。「はかないのは我が身なのであった。朝顔に朝に置いた露も、起きて見たらいいのであろうか」の意。やや分かりにくいのが、我が身と朝顔の露の、どちらがはかないか、朝起きて確かめてみようというのであろう。「おきて」は「置きて」と「起きて」の掛詞である。

以上が、「…を見て」の形で詠まれた、何らかの心境・心情が託された歌になる。⑦卯の花・⑧山菅・⑨山菅は、それぞれ憂・止まず・山を掛詞で導いて心情が託され、⑩梅の香は人の香を導いていた。これらの歌での花は言葉の次元でかわかって、⑪にあったように「花は心の見なし」として詠まれていた。⑫も同じである。また、花に命のありようを見ることも託され、⑬は「花ぞこの世の絆し」、⑭宿花は返らない齢、⑮⑯は朝顔の露のようなはかなき、が詠まれていた。

こうした歌々から、先の連作歌群とは違った、和泉式部にとっての

前栽を見ることの意味が読み取れよう。「花は心の見なし」とする把握は、花と心が一体のものとして捉えられていることを暗示している。前栽の花は、和泉式部にとって慰めを得るよりも、世のつらさ、はかなさを実感させるものであったと言えよう。また、そうであることによつて、「花ぞこの世の絆し」とする把握もなされるのである。前栽は、和泉式部の和歌生活や人生において、かけがえのないものであったことを窺わせるのである。

なお、「…をながめて」の形で前栽が詠まれる歌は次節で扱うが、二二二・八四六は感興を覚えての歌なので省略する。

花々の様子に感興を覚えた場合の歌は、次のような例を念頭に置いている。一例のみ引いておきたい。

ただの梅、紅梅など多かるを見て

④ 梅の花香はことごとくに匂へども色は色にも匂ひぬるかな(続・一七三)

この歌で、梅花に対して何らかの心境が添えられているわけではない。純粹にその美を詠んでいるだけである。これまで見た歌とは、詠風が違っていよう。個々の花に感興を覚えて詠歌しているのである。「…を見て」の形でこうした花の詠まれ方をするものは、次のようになる。歌番号だけを提示しておきたい。

二二二、五一三、五一四、続・一六二、続・一六四、続・一六五、
続・一六九、続・一七三、続・一八七、続・一九〇、続・一九一、
(続・四四二)、続・五三〇、続・五五二

三 荒れたる宿

通い婚の当時にあつて、女は自分のところから男が離れていくことを危惧していた。男の来訪が途絶すれば、おのずと庭や家の手入れも怠ることになる。この状態を的確に表す歌語が、諸注指摘はないが、

「荒れ」と「離れ」の掛詞であつた。前者は庭や家の荒廢、後者は男の不訪をそれぞれ象つていた。ここではこうした「あれ」が詞書や歌で使用される庭にかかわる歌を見ていきたい。なお、本文作成は掛詞の場合、平仮名表記にするのが通例だが、「あれ」の時のみ「荒れ」とするが、「離れ」も意識されたい。

冬

① 宿は荒れて霰し降れば白玉を敷けるがごとくも見ゆる庭かな(六八)

百首歌の冬題の一つである。二句は「あられふれば」だが、『全釈』のように「し」を補つた。この歌には、「宿」と「庭」が共に詠まれている。「あの人の訪れない家は荒れているが、霰が降ると、白玉を敷いたように見える庭であることだ」の意。「宿は荒れて」は、男の不訪とともに、冬の歌なので庭に枯れた草々が見える状態となる。そこに霰が一面に降ると、白砂の庭のように見え、荒れた宿には見えないというのである。これは『全釈』が引く「あらかじめ君来まさむと知らませば門に宿にも玉敷かましを」(万葉・六・一〇一三)が念頭にあるとすると、「白玉を敷けるがごとく」く見えたというのは、男の来訪を念じていることになろう。「宿は離れて」いる状態なので、なおさら来訪が望まれるのである。

いといたう荒れたる所にながめて

② 語らはむ人声もせず繁れども蓬のもと問ふ人もなし(続・一一)

この歌は、本来の形の歌ではなからう。「語らはむ人声もせず」とありながら「問ふ人もなし」とされ、同様の意味が重なっている。また、諸注に指摘はないが、次の⑤の初二句と③の下三句を合わせた形になっており、この二首が目移りで誤写されて混淆したものと見なせよう。詞書もほぼ同じである。参考のために引用した。

いといたう荒れたる所をながめて

③ 三輪の山杉に劣らず繁けれど蓬の宿は訪ふ人もなし(続・二五)

④ 消ゆる間の限り所やこれならん露とおきぬる浅茅生の宿(統・二五八)

⑤ 語らはん人声もせず荒れにける誰が古里に来てながむらん(統・二五九)

この三首は「いといたう荒れたる所をながめて」とされた折の連作となろう。一節で見た連作とは趣が違っており、前裁の風情に主眼があるわけではない。「ながめて」とあるので、荒廃した庭を見ての物思いする感慨を詠んだ歌になる。詞書であっても「荒れ」は「離れ」を示唆している。

③は、「三輪山の杉に劣らず繁っているけれど、蓬の繁る家には、三輪山とは違って訪ねてくれる人もいないのだ」の意。「我が庵は三輪の山もと恋ひしくは訪ひ来ませ杉立てる門」(古今・雑下・九八二)によっているのは確かである。庭に雑草が繁茂している家は「蓬の宿」となり、それは「荒れたる所」「荒れたる宿」で、人の訪れのない「離れたる宿」なのである。次の「浅茅生の宿」も同じである。

④は「荒れたる所」が「浅茅生の宿」とされ、そこは人生最期の家と意識されている。「露」ははかなさと、涙の例えになっている。「命が消えるまでの間の最期の場所はここであろうか。はかなく置く露と共に涙にくれて起き臥しする浅茅の生い繁るこの荒れた家は」の意。浅茅生となった庭を眺めることは、男の不訪を思うことであり、ここでは人生の最期が意識されている。蓬や浅茅の生い繁る庭は、その家象徴するのである。

⑤は「語り合おうとする人声もせず荒れてしまった。いったい誰の古里に来て物思いして庭を眺めているのだろうか、ここは私の家なのに」の意。「あれ」の掛詞は、文脈的には、「離れ」から「荒れ」が導かれていよう。

⑥ 女郎花露けきままにいとどしく荒れたる宿は風をこそ待て(統・

この歌には、「荒れたる宿」が使用されている。「いたうあばれたる所」が歌で「荒れたる宿」とされている。この言い方は邸宅の荒廃を言う場合もあるが、庭に雑草が繁茂したり、蜘蛛の巣が張ったりする家のことになる。歌語としては、「荒れたる宿」は和歌では孤閨の女を象徴する景物⁵⁾になり、それは、「荒れ」と「離れ」の掛詞を形成するからである。この歌は、「女郎花にしとどに露が置いて重くなるので、大層荒れて人もいない家では、吹き払ってくれる激しく吹く風が待たれることだ」として、裏に「女の私は涙にくれているので、荒れて見離された家に来てくださる人が待たれます」の意を添えたことになる。「女郎花」を自身に、「風」を男にそれぞれよそえたのである。「いとどしく」は「露けき」と「荒れたる」の両様にかかっている。

* * * * *
庭を荒れたとする視線は、同時に男の不訪を思うことであった。その際に「荒れ」と「離れ」の掛詞が有効に作用していた。そして、歌語としての「荒れたる宿」も使用されるのである。この歌語は、『伊勢集』冒頭歌となる「人住まず荒れたる宿を来て見れば今ぞ木の葉は錦織りける」(後撰・冬・藤原仲平・四五八)あたりに遡源できる。和泉式部は「荒れたる宿」を⑭や⑯以外にも使用しており、簡単に確認しておきたい。

冬ころ、荒れたる家に一人ながめて、待たるる事のなかり
しままに、言ひ集めたる

荒れたる宿

⑦ なかなかには我は人かと思はずは荒れたる宿もさびしからまし
(二六四、統・五六〇)

月の明かき夜、人に

⑧ 月を見て荒れたる宿にながむれば見ぬ来ぬまでもなれに告げよ
と(二二〇、日記歌)

⑨ 思はしを荒れたる宿にかきくらす蜘蛛のいがきに風したまらば

またほどへて、おはしましし所を、ものたよりに見て

⑩ 思ひきや塵もるざりし床の上を荒れたる宿となしてみるとは

(統・五八)

いずれの歌も前栽は詠まれていない。ただ「荒れたる宿」とするだけである。しかし、庭の荒廢は含意されていよう。そして、ここに相手の男性の「離れ」が意識されている。

⑦は、題に応じた孤閨をかこつ連作歌群(二六三〜一七二、統・五九〜五六八)のうちの一首で続集に拠った。前節で見たように、「前栽のおもしろきを見て、言ひ集めたる」(四六七)歌があったが、ここではより物思いの状態が深くなっている。「荒れたる宿」と詠まれる所以である。

⑧は日記にある歌で、まだ七月にはなっていない。ここは「離れ」が強く意識されていよう。日記からすると、和泉式部の家が荒廢していても思えないので、帥宮の訪れがないことからわざと「荒れたる宿」を使用したことになろう。

⑨⑩の歌だけ、「荒れたる宿」となる所以が詠み込まれている。⑨は(14)と同歌で、「蜘蛛のいがき」によって「荒れたる宿」とされている。同様の発想は、前栽とかかわらないが、「軒端だに見えず巢がける我が宿は蜘蛛のいたまぞ荒れ果てにける」(一九九)にも見られる。⑩は共寝がないために「床の上」に塵が積もった様子から「荒れたる宿」が言われている。

右の四首には、前栽の荒廢の意が、表面には出ていない。しかし、そうであっても、やはり「荒れたる宿」に庭の荒廢を認めるべきであろう。庭の荒廢は、満たされない和泉式部の恋の思いの「心のみなし」ともなろう。「荒れ」と「離れ」の掛詞や「荒れたる宿」とする把握は、和泉式部の抱いている憂愁の思いの反映であり、固有の歌ことばとして注意されるのである。

四 草葉へのまなざし

「荒れたる宿」は、蓬・葎・浅茅などが繁茂する家のことであった。言葉を換えれば、草葉へのまなざしや「花は心の見なし」とする思いが「荒れたる宿」と意識させるのであった。和泉式部には、草葉に寄せる独特の思いがあるようで、前節までに挙げた(9)(10)や(3)(4)など以外にも詠まれている。この節では庭の草が詠まれている歌を見ていきたい。その際に参考になるのが『和泉式部日記』である。

夢よりもはかなき世の中を嘆きわびつつ明かし暮らすほどに、四月十余日にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。築地の上草あをやかなるも、人はことに目もとどめぬを、あはれとながむるほどに、近き透垣のもとに人のけはひすれば、誰ならんと思ふほどに、故宮にさぶらひし小舎人童なりけり。『和泉式部日記』著名な日記冒頭部である。地の文になるが、和泉式部は「築地の上草」が青々としている様子を見出している。この光景は、ここで言われるように「人はことに目もとどめぬ」ものであった。すでに「式部には青く茂った草に特に感慨を覚えることがあったらしい」とされ、また「青々とした草は、漢詩文では夫と離ればなれになった妻の悲しみを彩る景物」との指摘もある。冒頭部を考えるためにも、その例を確認しなければならぬ。以下は前栽に生える草の例である。あやめ草・葵草・忘れ草・真菰草・しのぶ草などの例は除外した。

草は枯れた場合も含めると、春夏秋冬いずれの季節でも詠まれている。そして、多く人事や物思いが絡んでいる。題詠で前栽を詠む場合であっても、自身の体験の反映であるとして具体的に見ておきたい。

春

⑪ 春雨の日をふるままに我が宿の垣根の草は青みわたりぬ(一三三)歌は、「春雨が日を経て降るにつれて、私の家の垣根の草はあたり一面青々とした来たよ」の意。春雨が草の色を深く染めるといふ発想

である。室内から庭を見ている形になる。日記では築地の草であったが、ここは「垣根の草」が注視されていて、趣向として共通性があるろう。この歌語は「わびわたるわが身は露を同じくは君が垣根の草に消えなん」（後撰・恋二・六四九・紀貫之）などとすでに詠まれている。しかし、草の青さを注視することは和泉式部固有の好尚となろう。

夏

⑫ 庭のままゆるゆる生ふる夏草を分けてばかりに來む人もがな
(二二三)

歌は「庭全体にのびのびと生える夏草の中を、掻き分けんばかりに來てくれる人がほしいことだ」の意。「夏草」が繁茂する様は、「かれ果てむ後をば知らで夏草の深くも人の思ほゆるかな」（古今・恋四・六八六・凡河内躬恒）のように募る恋の思いの表象になる。だから、庭一面に生えた夏草を掻き分けて來てくれる人が望まれるのである。『全書』は「親しく氣やすい人を欲する意」とするが、恋の相手であろう。

冬

⑬ 夏のせし蓬の門も霜がれて律の下は風もたまらず (六五)

歌は「夏の間を繁っていた蓬の門も、今は霜に枯れて、律の下に風はたまらず、あの人も訪れないことだ」の意。冬の霜枯れた律が、蓬と共に詠まれている。「霜がれ」の「かれ」は、「枯れ」と「離れ」と掛詞になるので、「風もたまらず」ともども男の不訪が含意されている。「夏のせし」とあるので、その男とは夏に交渉を持ったということになるか。春夏の草の青さと共に、冬の枯れた様にも注視しているのである。⑭も同様になる。

ある人の來むと言ひたるに

⑭ もしも來ば道の間ぞなき宿はみな浅茅が原になり果てにけり
(二四一)

この歌は⑫と同じような発想である。「もしもあなたが來られたとしても、通り道はなくなっていますよ。家の庭はみな、すっかり浅茅

の野原になってしまっている」の意。言葉通りに訪ねてほしい意を潜めて、庭の道も見えなくなって「浅茅が原」のようになった家まで、本当にわざわざ訪ねてくれる気があるのですかと詰問するのである。「浅茅が原になり果てにけり」は、男の來訪がないために、そうなってしまった意になるので、これまでの冷淡さにも皮肉で応じているのである。

返し

⑮ 寝られねど八重葎せる槿の戸におし明け方の月をだに見ず (二五五)

贈歌「まさみちの少将、有明の月を見ておぼし出づるなるべし／寢覺して一人有明の月見れば昔見馴れし人ぞ恋しき」に対する返歌である。「寢覺どころか、まったく寝られませんが、誰も訪れなく八重葎が繁って閉ざされた槿の戸を押し開けて、明け方の月などを見もしませんよ。だから、昔のことなど思い出しもしません」の意。贈歌を二重に切り返した才氣あふれた歌になっている。男の不訪を暗示する「八重葎せる」は実際のことではないが、わざとこう言って、男の言い分を拒絶するのである。

觀_レ身岸額離_レ根草、論_レ命江頭不_レ繫舟

⑯ 誰か來て見るべき物と我が宿の蓬生嵐吹きはらふらん (二七八)

⑰ さなくとも寂しきものを冬來れば蓬の垣のかれ果てにして (三〇七)

この二首は『和漢朗詠集』にある古詩「觀_レ身岸額離_レ根草、論_レ命江頭不_レ繫舟」の訓を、一音ずつ歌の頭に置いて詠んだ四十三首の連作歌群中の歌になる。こうした歌にも和泉式部の庭への思いが入り込んでいる。

⑱ は「いったい誰が訪れて來て見ようというので、私の家の庭に生えた蓬を、風が吹き払って道をつけるのだらうか」の意。⑭とは違い、ここでは訪れる男の不在が観念されている。同連作中の「庭の間も見えず散り積む木の葉くづ掃かでも誰の人か來て見ん」(二八〇)も同

様の発想。

①⑦は「そうでなくても人が訪れないのは寂しいものなのに。冬になると蓬の垣根もすっかり枯れ果てて、一層寂しさが募ることだ」の意。ここも「かれ」は「枯れ」と「離れ」の掛詞になる。

草のいと青やかなるを、遠く往にし人を思ふ

⑱ 浅茅原見るにつけてぞ思ひやむるいかなる里にすみれ摘むらん
(七〇三)

⑲ 誰わけん誰か手馴れぬ駒ならん八重繋りゆく庭の群草(七〇四)

⑳ は「浅茅の繁る野原を見るにつけても、思いを馳せることだ。遠くに行ったあの人は、どのような里に住み、スマレを摘んでいるのだろう」の意。青々とした「浅茅原」を見ることと、遠くに行った人と思うことが、どのような連想関係にあるのかが分かりにくい。ここは㉒のように、「草のいと青やかなる」様が、募る恋の思いの表象となり、その関係にあった「遠く往にし人」を思うのであろう。「里にすみれ摘む」は、「里に住み」と「スマレ摘む」の掛詞である。「スマレ」は、『古今集仮名序』『古今六帖』『赤人集』などにある、「春の野にすみれ摘みにと来し我ぞ野をなつかしみ一夜寝にける」(万葉・八・一四二四・山部赤人)が念頭にあるとすると、新たな女性と出会っているのだろうかの意が潜められているのであろう。この人は、道貞か保昌か。

㉑ は「誰が分け入って来よう。誰の手馴れた駒になろうか。八重に繋り行く庭の草叢を分け入るのは」の意。「手馴れぬ駒」の「ぬ」は完了。ここは『全釈』が指摘するように、「我が門の一むら薄刈り飼はん君が手馴れの駒も来ぬかな」(後撰・恋二・六一六・小町が姉)が念頭にある。男の来訪の断念と期待が入り交じった歌になる。

雪の降る日いかが、など人の言ひたれば

㉒ 掻き曇る中空にのみふる雪は人目も草もかれがれにして(七一三)

歌は「掻き曇り、中途半端に過ぎしている、空から降る雪の日は、

どっちつかずの人の訪れもなく、草も枯れ枯れになっていることだ」の意。「ふる」は「降る」と「経る」を掛ける。『全書』は「中空は、男が中途半端の意を掛く。男の疎遠を怨む意。枯れと離れを掛く」とするが、「中空」は女の様子にもなる。

人の文のあるを見て、六月ばかり

㉓ 庭のまま生ふる草葉を分け来たる人も見えぬに跡こそありけれ
(八一二)

歌は「庭全体に生えている草葉の中を分け入って来た人も見えないのに、足跡ならぬ筆跡があったことだ」の意。㉒と同様の発想が据えられている。

草のいと青う生ひたるを見て

㉔ わが心夏の野辺にもあらなくに繁くも恋のなり増るかな(続・九九)

歌は「私の心は夏の野辺でもないのに、葉が繁るように恋心が募りまさっていることだ」の意。庭の「草のいと青う生ひたる」様を「夏の野辺」に見立て、葉の繁りに恋情の高まりをよそえている。ここも㉒と同様の発想がある。素直な恋情の高まりを意識する相手は、帥宮がふさわしい。しかし、この歌は帥宮挽歌群の歌であった。追慕の情が、生きている人への恋であるかのように詠まれたのである。

宵の思ひ

㉕ 宵ごとに物思ふ人の涙こそちぢの草葉の露と置くらめ(続・一三三)

歌は「つれづれの尽きせぬままに、おぼゆる事を書き集めたる歌にこそ似にたれ。昼偲ぶ、夕べのながめ、宵の思ひ、夜中の寢覚、暁の恋、これを書き分けたる」とされた歌群の中の「宵の思ひ」の一首。この歌群は、帥宮挽歌群の中に位置している。歌は「宵ごとに亡き宮様を思う人の涙は、さまざまな草葉の露となって置くのでしよう」の意。宵の物思いが、庭の草葉に置く露を見出したのである。

七月七日、織女にかはりて待つころ、草の露を始めて見る

②④ 風の音に秋来にけりとおどろきて見れば草葉の露も置きけり
(続・三七八)

歌は「風の音で秋が来たかと驚いて目を覚まして庭を見てみると、起きではないが、草葉の露も置いていたのであった」の意。「露もおき」の「おき」が「起き」と「置き」の掛詞になっている。風の音で秋を感じるのは当時の季節感であった。また、七夕詠になるので、男の来訪をよそえている。

以上、庭の草葉を詠む歌を見てきた。夏草の繁りは恋の高まりを表象する一方で、男の不訪を暗示していた。草葉の繁りが恋の障害と意識され、また、草葉の「枯れ」は「離れ」を導いていた。「かれ」は「あれ」と同じ位相を保持している。草葉に寄せる歌は、和泉式部固有の恋に満たされない思いが多く込められているのである。

五 孤愁を誘う庭の花

草葉の繁茂や「枯れ」を詠むことが男の不訪を暗示していたが、さらに、四季折々に庭に咲く花を、独り眺めることで、男の来訪のなさを嘆いたり、愁いたりする歌も認められる。庭の花が草葉の場合と同じように孤愁の思いを誘うのである。ここでは、こうした歌を季節順に見ることにしたい。

まず梅である。

春

②⑤ 春はただ我が宿にのみ梅咲かばかれにし人も見にと来なまし
(四)

百首歌の春題の一つである。「春になって、ただ私の家だけに梅が咲くならば、離れて行ってしまった人も、見ようとして来るかもしれないのだが」の意。「かれ」は「離れ」と、梅の縁語「枯れ」の掛詞になるが、この歌ではあまり機能していない。梅はどこにでも咲くので、自分の家だけに咲けばとする仮定は、絶対に実現しない。だから

「かれにし人」が来ることもない。「人の来ることのないことの、その当て・見込みのなさの、絶望的な詠歎であり、したがっては、儂い切望の詠歎である」とする指摘がある。梅花に失われた恋を思うのである。

春

②⑥ 人も見ぬ宿に桜を植ゑたれば花もてやつす身にぞなりぬる(一)
一)

②⑦ 我が宿の桜はかひもなかりけり主人からこそ人も見にくれ(一)
二)

②⑧ 見にと来る人だにもなし我が宿のはひりの柳下払へども(一六)

②⑨ 散りにしは見にもや来ると桜花風にもあてで惜しみしものを
(七八九)

三月晦がたに

③⑩ 誰にかは折りても見せんなかなか桜咲きぬと我に聞かすな
(続・九六)

②⑥は、「あの人も見に来ない家に桜を植えたので、美しい花を栄えなくさせる身となってしまったことだ」の意。どの人であれ、見に来てくれるならば、桜は栄えあることになる。しかし、自分だけしか見ないので、そうはならないのである。美しい桜を栄えなくさせた我が身の孤愁をつくづく感じるのである。

②⑦は、「私の家の桜は咲くかきもないのであった。主人次第によって人も見にくるのだから」の意。自分のせいで誰も見に来ないので、桜にとって咲くかきがないと嘆じるのである。②⑥と同じ趣向であり、孤愁の思いが身にしみるのである。

②⑧が問題だが、配列からして桜を見に来ると思えるのでここに置いた。「あの人どころか、花を見に行こうと来る人さえいない。私の家

の入り口に植えた柳の下を通りやすいように枝を払って待っていたけれども」の意となろう。前二首と似たような趣向だが、この歌ではまだ通って来る男がいる設定になる。だから床の塵を払うかのように、下枝を払って待っていたのである。しかし、花を見に、誰も来なかったのである。なお、この歌の中心は柳となろう。

②9は「散ってしまったよ。もしか見に来るかもしれないと思って、桜花を散らす風にも当てないで大切に惜しんでいたのね」の意。

「散りにしは」の「は」は詠嘆の終助詞。花の盛りの折に女のもとを訪ねるのが愛情の証になる。しかし、男は来なかったのである。そこでほとんど散ってしまった枝につけて歌を贈ったのである。「散る」は、愛情の喪失を暗示させるので、歌は男への難詰となっている。

③0は、帥宮挽歌群の歌である。詞書の「三月」は、伝行成切の「二月」がいいであろう。「いったい誰に折って見せようか、そんな人はいないのだ。なまじっか、桜が咲いたなどと私に聞かせないでほしい」の意。帥宮亡き今、桜を互いに見る人などいないのだと孤独を実感するのである。桜を囑目しての歌ではない詠み方であるが、桜を見ていてもおかしくはない。

次は花橘。当時、最も好まれた夏の風物になる。

橘につけて人に

③1 誰にこの花を見せまし我をれば山郭公さらに来鳴かず (四二二、
続二八二)

四月ばかりに、橘の咲きたるを

③2 橘の花咲く里に住まへども昔を来問ふ人のなきかな (六九四)

橘を見て、昔の人を思ひ出でて

③3 薫る香はそながらそれにあらぬかな花橘は名のみなりけり (七〇八)

〇八

③4は、「誰にこの橘の花を見せたらいいでしょう。私が居ると、山時鳥はまったく来て鳴きませんので、見せられませんか」の意。時鳥を相手の男性、自身を花橘によそえている。だから、宿となる橘に

時鳥が来て鳴かないというのは、男が自分のもとに来ないのを詰ったことになる。さらに、「誰に：見せまし」で、暗に他の男の人を見つけたようかしらと脅しているのである。

③5は、「橘の花の咲く里の家に住んでいるけれども、昔のことを、来て尋ねる人はいないことだ」の意。橘は時鳥と共に懐旧の思いを誘う景物とする当時の常套的な発想で詠まれている。「昔」は、「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(古今・夏・一三九)によって、愛し合っていた昔のことになる。この古今歌は、次の歌にもかわっている。

③6は、「薫っている香は、橘のままながら、昔の人のものではないことだ。花橘の香には昔の人の袖の香がするというのは、評判だけであつたのだ」の意。詞書と整合しないようにも見えるが、こうした詠み方で懐旧しているのである。昔の人はもう来ないことを確信してもいよう。

次は、秋の萩である。

秋

③7 人もがな見せん聞かせん萩の花咲く夕影のひぐらしの声 (五〇〇)
歌は、「人が来てほしい。見せたい、聞かせたい。夕日に萩の花が咲き、そのもとで蜩の鳴く声を」の意。「人」は誰でもいいから、とにかく見聞かせたい人とも考えられるが、この情景を一緒に眺めるのは、やはり恋人であろう。しかし、それを超えて、どうでもいいからすぐにでも、ということになるうか。見聞かせたいのは、「萩の花咲く夕影のひぐらしの声」であり、「はぎ」と「ひぐらし」とは、見と聞と二つながら、実は一つに渾然とした情景^③とするのがいいであろう。

次は薄である。薄も庭に移植されていた。

③8 花薄招くたよりはかひもなし心知りなる人し見えねば (六〇三二)
歌は、「花薄が靡いて人を招く手立てはかいいないことだ。気心の知れる人は見えていないので」の意。本文二句末に「は」を補った。

「花薄」に感情移入しているのであろう。「心知りなる人」は、恋の相手となるう。

以上が、花に寄せて孤愁を実感する歌であった。「あれ」の掛詞を使用した歌、草葉に寄せた歌とも関係しており、いずれも和泉式部の前栽とのかかわり方が理解されるのである。

六 前栽の贈答

前栽の花々は、貴族たちの間で贈答に供されていた。花の美しさを共有したり、移植したりするために贈答されたのだが、そのため以外の効用も認められる。最後に植栽が贈答される歌を見ていくことにしたい。

葵をやるごと

③⑥ みな人の挿頭にすめるその草の名は何とかや言ひて聞かせよ
(五五九)

賀茂祭の風物となる「葵」は、「逢ふ日」と掛詞になることから、逢いたい意を伝えるために贈った際に詠み添えた歌である。「どの人も挿頭にするらしいその草の名は、何であったでしょうか、私に言つて聞かせてください」の意。相手から逢いたいと言わせたいために、わざと草の名を知らないふりして詠んだのである。

同じところなる人の、異方におきて、唐撫子を、大和ならぬなむあるとて、おこせたるに

③⑦ かひなきは同じ垣ほに生ふれどもよそふるからの撫子の花(七三〇)

同居していた人(姉妹か)が、他出した先から、唐撫子を、大和撫子ではないわと言つて、贈つて寄こしたので詠んだ歌である。「異方におきて」は、他所にあつての意。唐撫子は当時まだ珍しかったので贈られたのである。歌を統一的に解するのは難しいが、「おもしろくないのは、同じように垣根に生えているけれども、他所からの唐撫子

であったことですし、同じ家に住んでいながら、他所で過ごしているあなたを唐撫子によそえることですよ、早くお帰りなさい」となるうか。「よそふる」は、「よそへる」と「他所経る」、「から」は理由をしめす「から」と「唐」を掛けている。外出したままでいるので、贈られた唐撫子の「から」を利かせて、早く帰るように促したのである。

南院の梅花を、人のもとより、これ見て慰めよとあるに

③⑧ 世に経れど君に遅れて折る花は匂ひて見えず墨染にして(続・四八)

「南院」は亡き帥宮敦道親王の家であり、そこに和泉式部もかつて召人として住んでいた。この「南院」を東三条邸南院とするのが定説だが、これとは別の「冷泉院御在所南院」のことであろう¹⁰。逝去を悲しんでいる和泉式部に、ある人が、南院の梅花を折り贈つて来て、これを見て慰めなさいと言ひ添えてあつたので詠んだ歌である。「私はこの世に生きてはいるけれど、宮様に死に遅れて折る花は、匂うように美しく見えます。墨染めの色なので」の意。多分、慰めにはなつたのであろうが、こう詠んで喪失の深さを訴えたのである。

二月ばかりに、前なる橘を人の乞ひたるに、ただ一つやる
とて

③⑨ 取るも憂し昔の人の香に似たる花橘になるやと思へば(続・一〇一)

部屋の前に植えた橘の実を乞われたので、贈る際に添えた歌である。実としたのは、枝や花では「一つ」と言わないこと、歌の「なる」は実がなるが掛けられていることからである。「人」は愛人関係にある男性であろう。「たくさん取るのも辛いのですよ。昔の人の香に似た花橘の、その実になるのかと思う」との意。ここの「昔の人」は亡き帥宮。

月の明かき夜、梅の花を人にやるとて

④⑩ いづれとも分かれざりけり春の夜は月こそ花の匂ひなりけれ
(続・一七一)

月の光と白梅を見まぢがえるとする発想で詠まれている。「どちらとも見分けがつかせませんでした。春の夜の月は白梅の美しさでしたので」の意。月の風情によそえて白梅を贈ったのである。

十二月ばかり、物染めさせて、花やあると人に乞ひたりし、
二月廿日あまりばかりにおこすとて、花乏しき春かな、と
言ひたるに

④1 咲けど散る花はかひなし桜色に衣染め着て春は過ぐさん（続・一七五）

染色のための花が贈答された際の歌である。「咲いても散る花はかひのないことだ。桜色に衣を染めて着て、散らずにいる桜と共に春は過ぐすことにしよう」の意。和泉式部もみずから染色の差配したのである。ほんの少しだけと言って寄こしてくれたお礼の気持ちを含めたのである。続いて、同じように染色にかかわる歌を見ておく。

九月ばかり、物へ行く人、衣染むとて花乞ひたる、やると
て

④2 秋ゆかんたびの衣をいとどしく露草にしもなどか染むべき（続・二二六）

今度は和泉式部が、染めるための露草を贈った際の歌である。「秋が行こうとしているこの度の旅の衣を、大仰に露草でもってなぜ藍色に染めるのでしょうか」の意。

語らふ人のもとより、撫子をおこせて、かかる□たる
花はあらじ、と言ひたるに

④3 まことかと比べて見れど我が宿の花の露にはなほうてぬめり
（続・三三五）

恋人が自慢げに撫子を贈ってきたので返した歌である。「あなたの言うことがほんとうかと思つて比べてみたけれど、私の家の花の露にはやはり勝てないようです」の意。相手が恋人であるからこそ、わざと我が家の方がいいとするのである。

ほかなる子の、撫子の種少したまへと言ひたる、やると

④4 撫子の恋しき時は見るものをいかにせよとか種を乞ふらん（続・三二二）

花の種を恋われて贈る際の歌である。こここの「撫子」には、「子」が掛けられている。詞書にある「ほかなる子」である。「子がいとい時は会うもの、同じように撫子が恋しい時は花を見るものなのに、どうせよということで種を乞うのでしょう」の意となろうか。花だけでなく種も贈答されたのである。

種、花やかなる人にやると

④5 今の間朝顔を見よかれどもただこの花は世の中ぞかし（続・五三八）

花やかに時めいている人に朝顔を贈る際、栄枯盛衰を論じた歌である。相手は若い女性であろう。「今の方に咲いている朝顔をご覧下さい。美しいけれども、ただもうこの花は、世の中のものではないですよ」の意。何か忠告したい時に、わざわざ朝顔を選んだことになろう。朝顔はほかなるの表象であった。

以上、前栽の花々が贈答される際の歌を見てきた。花は、③⑥逢いたため、③⑦珍しさ、③⑧慰め、④③美しさ、④④染色用、④⑤諭すなどのために贈られるのであり、③⑨実や④④種の場合もあった。前栽の花々は、日々の生活に密着して贈答されたのである。

おわりに

和泉式部と前栽の花々や草葉とのかかわりを、和歌から見てきたことになる。各節の末尾に簡単なまとめを記したので、ここでは繰り返さないが、前栽が和泉式部の歌において切実な歌材であったことが理解されるのである。以上の観点以外でも、採り上げなければならない歌々が残されている。例えば「掘る」などにかかわる場合、あるいは、和泉式部の花に寄せる好尚その他である。また、『和泉式部日記』についてはほとんど触れていない。検討しなければならない問題が多い

が、これらを課題とすることで、ひとまず筆を措きたい。

注

- (1) 拙稿「平安貴族女性と庭——『伊勢集』の前裁——」(『大妻女子大学紀要—文系—』48、二〇一六・三)
- (2) 拙稿「『蜻蛉日記』道綱母の前裁——平安貴族女性と庭——」(『大妻国文』47、二〇一六・三)
- (3) 拙稿「『枕草子』の庭と前裁」(『大妻国文』48、二〇一七・三)
- (4) 武田早苗「前裁の風情——平安時代の和歌文学から——」(倉田実編『王朝文学と建築・庭園』平安文学と隣接諸学1、竹林舎、二〇〇七・五)
- (5) 近藤みゆき『和泉式部日記——現代語訳付き——』(角川ソフィア文庫、二〇〇三・一一)の補注(33)。
- (6) 尾崎知光『和泉式部日記考注』(東寶書房、一九五四・一一)
- (7) 注(5)に同じ。
- (8) 森重敏『八代集撰入 和泉式部和歌抄稿』(和泉書院、一九八九・五)
- (9) 注(8)に同じ。
- (10) 拙稿「王朝日記文学と東三条院南院・冷泉院御在所南院——敦道親王妃への仮説——」(秋山虔編『平安文学史論考』武蔵野書院、二〇〇九・一一)